

異文化の歴史理解切り開く

(御茶の水書房)が、西洋中心主義に陥りがちな歴史の多元化に挑戦した書として静かな波紋を広げている。

(泉田 友紀)

今年5月、ある若い歴史学者ががんのために亡くなった。32歳だった。死後4か月を経て刊行された最初の著書『ラディカル・オーラル・ヒストリー』

保苅実氏の遺作「ラディカル・オーラル・ヒストリー」

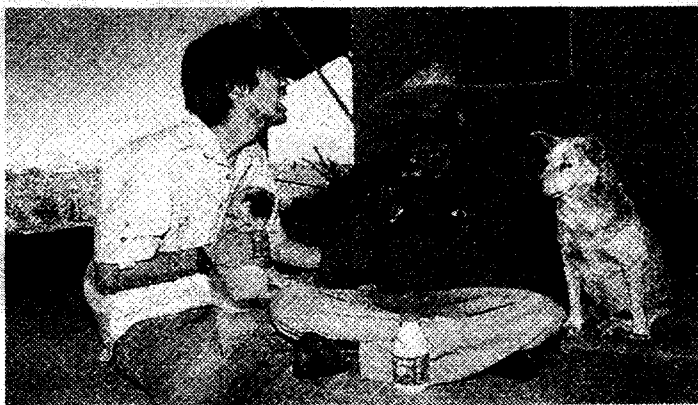
著者の保苅実氏は一九九七年にオーストラリアに渡り先住民文化アボリジニのコミュニティーで共に暮らした。まるで人類学者のようなフィールドワークを通じてかれらの声に耳を傾け、その歴史と真剣に向かい合った。

「大蛇が雨を降らせた」「大地が懲罰を与えた」、果ては「ケネディ大統領がコミュニティーを訪れた」と、長老が語る歴史は荒唐無稽なものばかり。従来なら一種のメタファー(隠喩)としてすくいあげるところだが、著者はそうしない。かれらにとっての「事実」があるがままに受け入れ、排除でも包摂でもない「ギヤップ」のコミュニケーションの可能性をねばり強く模索した。

「アカデミックな歴史学は(中略)経験的な歴史への真摯さ」と交渉関係にはいるべきである。歴史を生産・構築するのは歴史

学者だけではない。人たるものすべて、いや、大地や動植物、時には石までもが歴史を語る。「ラディカル」なオーラル・ヒストリーに注意を向けること、その重要性を説いた。

オーストラリア国立大学のテッサ・モリススズキ教授は「歴史理解の全く異なる世界の間に対話の空間を切り開いた。革新的な取り組みだ」と高く評価する。また、雑誌「思想」の元編集長、



アボリジニの長老と語り合う保苅実さん(左) 2000年ごろ、池原宏氏撮影

小島潔さんは「彼の主張が今すぐ受け入れられることは難しいかもしれない。だが、時限爆弾のように将来大きく爆発する可能性がある」という。

著者の実践は周囲の人たちの共感を呼んだ。博士号を取得したオーストラリア国立大学では死後に「保苅実奨学基金」を設立、アボリジニ研究をする学生に資金を支

給することを決めた (<http://www.hokarinomoru.org>を参照)。

生前、一度だけ取材したことがある。人なつっこい笑顔が印象的だった。「開かれた」彼の人が異文化間の開かれた歴史の道を歩ませたのだろう。今こそ、自らが投げ込んだ石の波紋を、彼岸で楽しそうに眺めているに違いない。